

発刊を祝う

清原貞雄

所謂地方史の研究が行われたのは固より事新しい事ではなく昔からあつたものである。一部の好事者が、往時を談ずる事を好む人間の本能から、自己の身邊に近い地方の昔の出来事、又は色々の仕来り、伝説の起原を穿索して之を語る。其の淵源は恐らく宗教などと同位古いものである。早くは風土記、やゝ降つては今昔物語などは斯様なものが伝承せられ、又は記されて居つたものを材料として存されたものである。無論それらは好事者の好事であつて専門的のものではない。それが専門的・考証的に行われるようになったのは江戸時代以後である。

明治維新に依つて藩が廢せられ國家が統一せられてからは、教育の上に、日本全体の歴史が組入れられ、其研究も進んで來たが、各地方を主題とする歴史的研究は却つて閑却せられる傾向を免れなかつた。或時は郷土史の名を以つて学校、特に小学校の教育に於いて取上げられた事もあるが、それが歴史教育としての確乎たる地盤を得るには至らなかつた。此の間に在つても一部の好事者が地方史を談ずる事は無論続けられて居つた。然しそれは何れかと云えば好事者の閑事業視せられ、學問としての高い地位と評価とが与えられぬ傾向があつた。

然るに近時に至つて地方史が學問として、其の内容も待遇も著しく向上した。其の理由としては、文部省が地方史の研究を奨励した事も無論考えられるが、其の理由は日本歴史の研究が進んだ事である。詳言すれば日本歴史の研究が進み、其研究が分化せられ専門化せられた事である。地方史研究の進歩・向上は、其の分化の一面に他ならないのである。いかなる學問に於いても、其の發達、研究の深化のために分化・専門化が必要であると同様、歴史學に於いても其の發達進歩のために分化・專

門化は必要であり、望ましい事である。只忘れてならぬ事は、如何に分化し専門化しても、其の究極の目的は全体の進歩であると云う事である。各地方各地方の史的研究が進むと云う事は、やがてそれが合せられて日本歴史全体の研究が完璧なものになると云う事に於いて始めて意義があり、価値があるのである。之を忘れて、所謂地方史家が、自己の好奇心を充たすと云う事にのみ終始したのでは、日本歴史全体の研究の進歩のたると云う實の目的に役立たぬ研究に、時と力とを費す場合があるかも知れぬ。之は甚だ遺憾である。

斯様な弊に陥らぬためには、地方史家が、お山の大将に守らせ、相互に連絡を取り、互に相励まし、相是正し、研究を補足し合う事が必要である。

地方史研究も最終的には日本歴史研究の完成のためである以上、其の協同も日本全部を一体とする事が理想であるが、實際問題としてはそれは殆んど不可能であろう。一単位を単位として協同して行くのが最も實際的の行き方であると思われる。此の意味に於いて、我が大分県地方史研究会の誕生は極めて事宜を得たものである。更に其の研究発表の機関雑誌を發行するに至つた事は、此の専業に於いて聞く可らざる点暗である。之に依つて折角の各自の研究を発表し、互に連絡し、相是正し、地方史家がやくもすれば強り易い独断・偏見を免れ、正しい地方史家（日本歴史全体の研究の一部を荷なう意味に於いての地方史家）として向上進歩して行く事が出来るのである。只斯様な学会、特に機関雑誌の発刊を維持し、継続して行く事には一方ならぬ困難の伴うものである事を覚悟せねばならぬ。それには会員の不断の努力と、相互犠牲精神とが必要である。各会員の努力と犠牲的精神とに依つて此の機関雑誌の刊行とを維持し發展せしめ、以つて日本史学の遺産の有力なる一助となる事を念願するものである。（文学博士 元広島大学教授）